

幼稚園教諭が捉える保育の質の構造に関する研究

— 日本版 SICS に基づく検討 —

●

●

渡部 努¹, 小原 倫子², 山下 晋¹, 米窪 洋介¹, 町田 由徳¹

Tsutomu Watanabe¹, Tomoko Obara², Susumu Yamashita¹, Yosuke Yonekubo¹, Yoshinori Machida¹

[要旨] 本研究は、幼稚園教諭が捉える保育の質の構造を明らかにするため、秋田らによって開発された日本版 SICS (Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings) の「保育全体の振り返り」の質問 64 項目を基に、幼児教育・保育の実務と研究の両経験を併せ持つ大学の教員 3 名を対象に予備調査を行い、保育の質の構造の中心的な要因となる質問項目の抽出を行った。予備調査の結果から得られた 21 項目について、幼稚園教諭 47 名を調査対象とし、質問紙による本調査を実施した。その結果、幼稚園教諭が捉える保育の質の構造について、「活動の計画性と柔軟な実行」「物理的環境」「保育者の関わり」「家庭との連携」「子どもの主体的姿」「保護者との信頼関係」の 6 因子を抽出した。本調査の結果は、OECD を中心とした議論の中で整理されてきた保育の質の構造と同様の要因であることが確認された。

[キーワード]

保育の質 SICS 幼稚園教諭

[Key words]

Quality of Early Childhood Education and Care SICS, Kindergarten Teacher

[所 属] 1 岡崎女子短期大学 (Okazaki Women's Junior College)

2 岡崎女子大学 (Okazaki Women's University)

1. 目的

岡崎女子短期大学は、平成 29 年度私立大学研究ブランディング事業に採択され、「子ども好適空間」研究拠点の整備を行うこととなった。筆者らは、子どもたちが生活の中で多くの時間を過ごす幼稚園や保育所等における、「子ども好適空間」について研究を行っている。幼稚園や保育所等における子どもの好適空間を考えた際、その空間にどのような物的な環境があり、その空間にどのような人的な環境があることが重要なのかを検討することが必要であると考えた。幼稚園や保育所等における「保育の質」に着目して検討を進めていくことが、「子ども好適空間」の在り方の検討に繋がると考えた。

平成 24 年「子ども・子育て支援新制度」により、日本における幼児期の教育・保育の「量的拡充」と「質の改善」に向けて、様々な施策が行われ、幼児教育・保育の現場においても「保育の質」の向上が

問われるようになってきている。

保育の質的向上について、幼児教育・保育の現場においては、これまで概念的に語られてきたところがあり、保育の実質的向上を制度的に図ることを考えると、保育の質の構造について明らかにすることが必要である。

OECD(2006)「Starting Strong II」¹⁾では、保育の質について、「志向性の質」「構造の質」「教育の概念と実践として内容や考え方」「保育プロセスの質」「園の実施運営の質」「子どもの成果の質」の 6 つの諸側面で捉えることができるとしている。また、秋田、佐川ら²⁾は、国内外の保育の質研究を概観する中で、保育の質について、構造的要因と過程的要因を分節化する必要があることを述べており、さらに保育過程の質をいかに観察し評価するかが保育の質評価の最大の課題と述べている。

国内外において、保育の質や保育の質を評価する尺度研究、保育の質が子どもの発達に及ぼす影響についての研究等が行われているが、実際に子どもたちと関わり、幼児教育・保育を実質的に担っている

保育者が、どのように保育の質を捉えているのかについての研究は、まだ少ない。

保育者が捉える保育の質について、全国の幼稚園、認定こども園、認可保育所、小規模保育所、認可外保育施設を対象にした淀川、野澤らの一連の研究がある。淀川ら³⁾は、園長・主任が考える「質の良い保育」について、自由記述回答の分析から、園長・主任ともに「環境」への言及が上位を占めていたことを報告している。また、野澤ら⁴⁾は、1歳児・3歳児・5歳児クラス担任が考える「質の良い保育」について、1歳児担任は子どもの安心・安定、経験や育ちを支える「保育環境への配慮」をより重視しており、3歳児・5歳児担任は子どもが自ら考え取り組むことを支える「主体性・自発性の尊重・育成」をより重視していること、幼稚園・認定こども園では「遊びを通じた成長・学び」への言及が多く、認可保育所・小規模保育所・認可外保育施設では、「保護者への支援・保護者との連携」を重視していることを報告している。淀川、野澤らの一連の研究は、保育者が捉える保育の質について、一定の傾向があることを明らかにしているが、保育者が捉える保育の質の構造については言及されていない。

保育の質を評価する方法として、テルマ・ハームズ、リチャード・クリフォードらによって開発された、保育環境評価スケール：ECERS-R（Early Childhood Environment Rating Scale-Revised）や保育プロセスの質の評価スケール：SSTEWS（Sustained Shared Thinking and Emotional Well-being scale）、F.ラーバースによって開発された、保育施設のための過程を重視する自己評価指標：SICS（Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings）などが開発されている。これらの評価スケールは、日本語に訳され、幼児教育・保育現場への保育改善のための適用が実践され、報告されている。ECERS-RやSICSは、OECDでも保育の質をモニターする指標の1つとして紹介されており、国際的にも一定の評価を得られている。

本研究では、保育の質を評価する方法の中でも、日本の保育場面を想定して作成されている日本版SICSを参考に、保育者が捉える保育の質の構造を明らかにすることを目的とした。日本版SICSは、秋田らの保育の質プロジェクト研究チームによって開発されている。この尺度における表現は、“日本語に直訳してそのまま使用するのはではなく、日本の保育文化の実態を踏まえて”⁵⁾作成しており、日本にお

ける保育の質を検討するにあたり、最も有効な指標であると考えられたことから、日本版SICSを参考にすることとした。

2.方法

(1) 予備調査

a. 調査内容

日本版SICSにおけるFormC「保育全体の振り返り」の質問64項目について、保育の質の構造における中心的な要因を検討するため、優先度の判定を行った。各質問項目に対して、「特に必要」と思われるものに○印を付記するようにした。

b. 調査対象

幼児教育・保育の実務と研究の両経験を併せ持つA短期大学の教員3名

c. 調査時期

2018年8月

(2) 本調査

a. 調査内容

予備調査において抽出された21項目において、質問紙調査を実施した。質問紙調査は、21項目について、「普段の保育の中で、どの程度大切にしているか」を「ほとんどあてはまらない」～「とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。また、その他に回答者の属性（保育職としての経験年数、園長・主任・クラス担任等の普段の仕事内容）を質問した。回答は無記名自記式で行った。

b. 調査対象

岡崎女子短期大学付属幼稚園3園に勤務する幼稚園教諭47名を調査対象とした。

c. 調査時期

2018年9月～10月

d. 分析方法

統計分析には、SPSS Statistics Ver.25を使用した。

3.結果と考察

(1) 予備調査

日本版SICSにおけるFormC「保育全体の振り返り」の質問64項目について、幼児教育・保育の実務と研究の両経験を併せ持つA短期大学の教員3名にて、優先度の判定を行った。その結果をTable.1に示した。

Table.1 日本版 SICS Form C「保育全体の振り返り」の質問項目と優先度判定の結果

質問項目	判定者 A	判定者 B	判定者 C
1.豊かな環境			
基本環境			
子どもたちが遊びと遊ぶ場所を選ぶように、保育室にいくつかの遊び場が設けられている。	○	○	○
保育室の環境は、子どもたちの興味と必要に応じて柔軟に遊びの場が作れるようになっている。	○	○	○
保育室の環境の構成は、子どもの遊びを促し、高めるようになっている。			○
隣り合う遊びの場はお互いに邪魔をすることなく、子どもたちが集中して遊べるようになっている。			
保育室や廊下などの園舎内の空間は、子どものために有効に活用されている。	○	○	○
保育室の環境の構成は、子どもの目線やサイズに適したものである。		○	
保育室は、どこに何があるかわかりやすくなっていて、子どもたちが簡単に出し入れできるようになっている。遊びに使う遊具や材料が、子どもたちの興味・関心を引くように置かれている。	○	○	○
子どもたちが戸外で遊んだり、散歩に行く機会が設けられている。			
保育のための遊具、道具、材料と活動			
それぞれの遊び場には子どもの人数や発達に合った遊具や材料が用意されている。	○	○	○
子どもの遊びを豊かにするような遊具や材料が多様に用意されている。	○	○	○
遊具や材料、備品などがきれいで使いやすい状態になっている。		○	
毎日、子どもが自分で選んで行う活動と、保育者が計画した活動が行われている。			
保育環境には五領域の発達を考慮した遊具や材料がある。	○		
遊具や教材、活動（あそび）は、一人ひとりの子どもの必要や興味、関心に応じたものである。	○	○	○
子どもたち一人ひとりが意欲的に遊びたくなるような援助が行われている。	○	○	○
保育活動に保育者の意図が反映されている。	○		○
保育者が計画する活動は、子どもが示す興味・関心に応じて、内容や設定が構成・再構成されている。			
2.子どもの主体性			
選択の自由			
子どもが好きなものを選ぶことができるよう様々な遊具を準備している。		○	○
子どもたちが、遊具や材料、活動（あそび）を自分で選び、主体的に取り組めるようになっている。	○	○	○
子どもたちは遊ぶ場を選ぶことができる。	○	○	○
約束事			
きまりと約束事は、子どもたちが理解できるように説明され、時には子どもたちと一緒に決めることもある。	○	○	○
きまりと約束事が子どもたちによく理解されるように工夫されている。	○		
参加			
子どもたちが責任感を持って活動に取り組んでいる。	○		
子どもたちは、様々なことを決める際、自分たちで考えて、主体的に参加している。	○	○	○
3.支援の方法			
励ます関わり			
保育者は、子どもたちの遊びが豊かに展開するように関わっている。			○
表情、視線、声の調子などに表れる保育者の思いが、子どもたちの活動への興味や意欲を高めている。			
子どもが活動を振り返ったり、発見したり、話し合ったりするように、保育者は質問をしたり、関わったりしている。		○	
保育者は、活動になかなか取り組めない子どもたちに配慮し、関わっている。		○	
感性			
保育者は、子どもたちに対し個別の配慮をしている。			
保育者は、子どもが自ら取り組んだことに対して、関心を示したり、質問をしたり、ほめたり、認めたりするなど、肯定的な反応を子どもに返している。	○	○	○
保育者は、子どもに対し、温かく、愛情を持って接している。	○	○	○
保育者は、子どもの思いや経験を言葉に置き換えて表現している。			
保育者は、子どもたちが感じたこと、したこと、考えたこと、期待していることなどに共感し、様々な方法でそれらを表現できるように関わっている。	○		○
保育者は、戸惑っている子を気にかけて、理解しようとし、援助している。		○	
自律			
保育者は興味ある活動を選んだ子どもの選択を尊重している。	○		
保育者は、子どもたちが活動の中で様々なことを試し、自分の思ったようにやってみることを認めている。	○	○	○
保育者は、子どもたちが自分でできることは自分でできるよう十分に配慮し、見守るときもある。			

質問項目	判定者 A	判定者 B	判定者 C
4.クラスの雰囲気			
雰囲気と人間関係			
子どもたちは仲がよく、楽しい雰囲気が感じられ、友だちを仲間はすれにすることがない。			
保育者が子どものことをよく知っており、子どもたちと一緒に様々な活動をしている。	○	○	○
子どもたちは保育者と良い人間関係にあり、頼りにしたり、ふれあいをとめたりし、依存しすぎることはない。			○
保育者が雰囲気作りと子ども同士の関わりのために気をつけておくこと			
保育室には、季節や自然が感じられ、落ち着いた色や、柔らかな素材のものが用いられている。	○	○	
時には音楽を流し、それに合わせて歌ったり踊ったりする。また、落ち着いてくつろいだ雰囲気を作っている。		○	
保育室には、子どもの作品や、活動で取り組んだものが、子どもに達成感を持たせたり、活動の振り返りができるように飾られている。	○		○
保育室には子どもたちの家庭や地域の文化を反映したものがある。			
保育者は活動を計画する上で、子どもたちが楽しめるような集団的活動を行うようにしている。	○		
活動の中でけんかやトラブルが生じた時、友達の気持ちに気づいたり、葛藤を経験したり、それを乗り越えたりするような援助が行われている。	○	○	○
子どもたちがお互いに助け合ったり、友達の良いところを認め合ったりするような活動が行われている。	○	○	○
5.園・クラスの運営			
一日の流れ			
子どもの発達や必要、生活のリズムに応じて、1日の流れが考えられている。	○	○	○
保育者は、子どもが1日の見通しが持てるよう配慮し、計画している。	○	○	○
日案は、個々の子どもの必要に応じて柔軟なものとなっている。	○	○	○
子どもたちを必要以上に待たせないように配慮している。			
保育者の役割			
保育者は子どもの状態や興味・関心に臨機応変に対応できるようにしている。	○	○	○
複数の保育者で保育する場合には、十分に打ち合わせをし、チームとして柔軟で、効果的に動ける体制を取っている。		○	○
集団編成			
子ども同士や、子どもと保育者との人間関係を考慮して、集団の編成を行っている。			
縦割りの集団を編成する場合は、それぞれの年齢に応じた活動が展開できるように工夫している。			
活動に応じて柔軟な集団編成を行っている。			
園全体の子ども、保育者が参加する行事・活動がある。	○		
6.家庭との連携			
家庭との連携			
送迎時に、家族と意識的に会話を交わすようにしている。	○	○	○
連絡帳が、子どもの様子を知ったり、伝えたりすることに役立っている。	○		○
一人一人の子どもの家族と定期的に話し合う機会が設けられている。		○	○
家庭への働きかけ			
「園だより」などで、園での子どもたちの様子、園の保育方針などを伝えている。	○	○	○
「園だより」などで、子育てのポイントなど子育てのための情報を伝えている。	○		
家族の参加			
子どもたちが家族と園で楽しむ行事・活動が設けられている。	○	○	○
園で、家族が子育てを学びあったり、相談したりできる機会がある。		○	

(赤字で記載された質問項目は、判定者3名が○印を付記したものを示す)

優先度の判定結果から、保育の質の構造における中心的な要因を検討するため、3名の判定者すべてが「特に必要」と回答をした21項目を抽出し、保育の質の構造を検討する本調査の質問項目とした。

(2) 本調査

日本版 SICS より予備調査によって抽出された21項目について、因子分析（主因子法、varimax 回転）

を行った。その結果、固有値が1以上の値を示したものが6因子であったことと因子解釈可能性の観点から6因子を抽出した。その後、2つの因子に0.4以上の因子負荷量を示した項目「子どもたちが、遊具や材料、活動（あそび）を自分で選び、主体的に取り組めるようになっている。」と全ての因子に因子負荷量0.4以上の値を示さなかった項目「子どもたちは遊ぶ場を選ぶことができる。」の2項目を削

除し、19 項目を再度、因子分析（主因子法、varimax 回転）を行った。その結果及び各因子における信頼係数 α （Cronbach）を Table.2 に示す。尚、第 5 因

子及び第 6 因子は説明する項目が 1 項目であったため、信頼係数 α は算出することができなかった。

Table.2 日本版 SICS より抽出した質問項目の因子分析表

		因子負荷量						共通性
		I	II	III	IV	V	VI	
I 活動の計画性と柔軟な実行								
15	子どもたちがお互いに助け合ったり、友達の良いところを認め合ったりするような活動が行われている。	0.817	0.105	0.085	0.087	0.004	0.149	0.715
16	子どもの発達や必要、生活のリズムに応じて、1 日の流れが考えられている。	0.706	0.082	0.163	-0.026	0.437	0.184	0.757
14	活動の中でけんかやトラブルが生じた時、友達の気持ちに気づいたり、葛藤を経験したり、それを乗り越えたりするような援助が行われている。	0.677	0.140	0.236	0.215	-0.001	-0.311	0.676
18	保育者は子どもの状態や興味・関心に臨機応変に対応できるようにしている。	0.655	0.193	0.252	0.257	0.153	-0.018	0.619
17	保育者は、子どもが 1 日の見通しが持てるよう配慮し、計画している。	0.646	0.278	0.029	0.145	0.248	0.397	0.736
II 保育の物的環境								
2	保育室の環境は、子どもたちの興味と必要に応じて柔軟に遊びの場が作れるようになっている。	0.305	0.814	-0.120	-0.032	0.095	0.196	0.819
3	保育室は、どこに何があるかわかりやすくなっていて、子どもたちが簡単に出し入れできるようになっている。遊びに使う遊具や材料が、子どもたちの興味関心を引くように置かれている。	0.246	0.708	0.028	-0.075	0.286	-0.070	0.655
1	子どもたちが遊びと遊ぶ場所を選べるように、保育室にいくつかの遊び場が設けられている。	-0.180	0.675	0.259	0.040	-0.031	0.288	0.641
6	遊具や教材、活動(あそび) は、一人ひとりの子どもの必要や興味、関心に応じたものである。	0.514	0.534	0.086	0.216	0.364	-0.135	0.754
4	それぞれの遊び場には子どもの人数や発達に合った遊具や材料が用意されている。	0.326	0.534	0.102	0.184	0.457	0.046	0.646
5	子どもの遊びを豊かにするような遊具や材料が多様に用意されている。	0.346	0.490	0.105	0.383	0.387	-0.189	0.703
III 保育者の関わり								
10	保育者は、子どもが自ら取り組んだことに対して、関心を示したり、質問をしたり、ほめたり、認めたりするなど、肯定的な反応を子どもに返している。	0.057	-0.056	0.752	-0.023	0.169	0.184	0.634
11	保育者は、子どもに対し、温かく、愛情を持って接している。	0.097	0.059	0.737	-0.034	-0.144	0.099	0.587
13	保育者が子どものことをよく知っており、子どもたちと一緒に様々な活動をしている。	0.423	0.216	0.532	0.150	0.093	-0.082	0.546
12	保育者は、子どもたちが活動の中で様々なことを試し、自分の思ったようにやってみることを認めている。	0.293	0.057	0.421	0.231	-0.008	-0.054	0.322
IV 家庭との連携								
20	「園だより」などで、園での子どもたちの様子、園の保育方針などを伝えている。	0.119	0.162	0.206	0.882	0.005	0.015	0.862
21	子どもたちが家族と園で楽しむ行事・活動が設けられている。	0.224	-0.163	-0.137	0.729	0.163	0.184	0.688
V 子どもの主体的姿								
9	子どもたちは、様々なことを決める際、自分たちで考えて、主体的に参加している。	0.120	0.259	-0.036	0.088	0.795	0.081	0.728
VI 保護者との信頼関係								
19	送迎時に、家族と意識的に会話を交わすようにしている。	0.070	0.114	0.147	0.088	0.039	0.548	0.349
因子寄与率		18.452	14.581	10.088	9.370	8.298	4.672	
累積寄与率		18.452	33.033	43.121	52.491	60.789	65.461	
α係数 (Cronbach)		0.857	0.858	0.707	0.732			

因子分析の結果、第1因子は、「子どもたちがお互いに助け合ったり、友達の良いところを認め合ったりするような活動が行われている。」「子どもの発達や必要、生活のリズムに応じて、1日の流れが考えられている。」「活動の中でけんかやトラブルが生じた時、友達の気持ちに気づいたり、葛藤を経験したり、それを乗り越えたりするような援助が行われている。」「保育者は子どもの状態や興味・関心に臨機応変に対応できるようにしている。」など、保育の活動や生活に関する項目、その活動や生活の計画に関する項目によって構成されていることから「活動の計画性と柔軟な実行」と解釈した。

第2因子は、「保育室の環境は、子どもたちの興味と必要に応じて柔軟に遊びの場が作れるようになっている。」「保育室は、どこに何があるかわかりやすくなっていて、子どもたちが簡単に出し入れできるようになっている。遊びに使う遊具や材料が、子どもたちの興味関心を引くように置かれている。」「子どもたちが遊びと遊ぶ場所を選べるように、保育室にいくつかの遊び場が設けられている。」など、遊びの場や遊具・用具に関する項目によって構成されていることから「保育の物的環境」と解釈した。

第3因子は、「保育者は、子どもが自ら取り組んだことに対して、関心を示したり、質問をしたり、ほめたり、認めたりするなど、肯定的な反応を子どもに返している。」「保育者は、子どもに対し、温かく、愛情を持って接している。」「保育者が子どものことをよく知っており、子どもたちと一緒に様々な活動をしている。」など、保育者と子どもとの関わりに関する項目によって構成されていることから「保育者の関わり」と解釈した。

第4因子は、『園だより』などで、園での子どもたちの様子、園の保育方針などを伝えている。」「子どもたちが家族と園で楽しむ行事・活動が設けられている。」など、園だよりや家族で参加する行事に関する項目によって構成されていることから「家庭との連携」と解釈した。

第5因子は、「子どもたちは、様々なことを決める際、自分たちで考えて、主体的に参加している。」の項目であることから「子どもの主体的姿」、第6因子は「送迎時に、家族と意識的に会話を交わすようにしている。」の項目であることから「保護者との信頼関係」と解釈した。

秋田ら²⁾は、保育の質に関する国内外の研究を展望する中で、OECD 保育ネットワーク会議によって

整理された保育の質について、学級の規模や保育者の教育歴といった「構造的要因」、保育・教育方法とカリキュラム、物理的環境、子どもと保育者、子ども同士のやりとりといった「保育過程」、家庭や地域との連携、家庭の教育資源といった「家庭」の3つの要因があることを述べている。第1因子として解釈した「活動の計画性と柔軟な実行」は、保育・教育方法とカリキュラムと同様のものであり、第2因子として解釈した「保育の物的環境」は、物理的環境であり、第3因子と解釈した「保育者の関わり」は、子どもと保育者のやりとりと同様のものであると考えられる。つまり、本調査対象とした幼稚園教諭は、普段、保育実践する中で、OECD 保育ネットワーク会議にて整理された保育の質と同様のものを構造として捉えていたことが明らかになった。

また、第4因子と解釈した「家庭との連携」、第6因子と解釈した「保護者との信頼関係」は、前述した「家庭」の要因と同様のものであり、この点においても幼稚園教諭は、保育の質の構造について、世界的な議論と同様の捉え方をしていることが明らかになった。

本研究において、保護者や家庭との連携や繋がりに関する因子が2因子抽出されたことは興味深い結果となった。これらの因子を説明する項目は少ないものの、「家庭との連携」因子と解釈したものに中には、園の保育方針や行事に関する内容が含まれており、保育・教育方法とカリキュラムに関わるものである。一方、「保護者との信頼関係」と解釈したものは、保護者など子どもの家族との関わりに関するものであり、幼稚園においても子育ての支援が、保育の質の一因として捉えられているのではないかと考えられた。また、本調査対象とした幼稚園は、いずれもバスによる送迎を行っており、保護者と日常的にコミュニケーションを取りにくい状況にある。そのため、保護者との信頼関係を構築することを保育の質の重要な要因の1つと捉えていたのではないかと考えられ、対象とした幼稚園の特徴が反映される結果となったことが推測された。

4.まとめと今後の課題

本研究では、日本版 SICS における「保育全体の振り返り」の質問項目を基に、幼児教育・保育の実務と研究の両経験を併せ持つ大学の教員3名を対象に予備調査を行い、保育の質の構造の中心的な要因

の抽出を行った。予備調査の結果から抽出された 21 項目において、幼稚園教諭 47 名を対象に本調査として質問紙調査を行った。

質問紙調査によって得られた回答から因子分析を行い、その結果、「活動の計画性と柔軟な実行」「物理的環境」「保育者の関わり」「家庭との連携」「子どもの主体的姿」「保護者との信頼関係」の 6 因子を抽出した。本研究の調査対象とした幼稚園教諭は、OECD を中心として議論されている保育の質の構造と同様の捉え方をしていることが明らかになった。

因子分析を行った結果、6 因子を抽出したものの、第 4 因子以降、その因子を説明する項目が少なく、その因子を十分に説明しているとは言えないところがある。予備調査において、優先度の判定を行う際に各判定者による判定基準の曖昧さがあったことや、その結果から本調査における質問項目を抽出する際に、項目数のバランスを欠いてしまったことが影響したと考えられる。

今後は、実際に子どもと関わり、保育を行う保育者が捉えている保育の質の構造をさらに明らかにするため、本研究から得られた知見に基づき、各因子における項目の再検討を行い、保育者自身が評価し、保育実践に繋げることができる「保育の質」評価の尺度構成を試みたいと考える。

[注]

本研究は、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会による研究倫理審査において、承認を受け、実施されたものである。
通知番号 (17)

「引用文献」

- 1) Starting Strong II: Early Childhood Education and Care OECD 2006
- 2) 秋田 喜代美 佐川 早季子 (2011) 「保育の質に関する縦断研究の展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 第 51 巻、pp.217-234
- 3) 淀川 裕美 野澤 祥子他 (2017) 「園長・主任が考える「質の良い保育」とは ―全国の保育・幼児教育施設大規模調査から①―」 『日本保育学会第 70 回大会発表要旨集』 pp.456
- 4) 野澤 祥子 淀川裕美他 (2017) 「1 歳児・3 歳児・5 歳児クラス担任が考える「質の良い保育」とは ―全国の保育・幼児教育施設大規模調査から②―」 『日本保育学会第 70 回大会発表要旨集』 pp.457
- 5) 秋田 喜代美 芦田 宏他 (2011) 「子どもの経験から振り返る保育プロセス 明日のより良い保育のために」 幼児教育映像制作委員会 pp.27

「参考文献」

- ・秋田 喜代美 箕輪 潤子 高櫻 綾子 (2007) 「保育の質研究の展望と課題」『東京大学大学院 教育学研究科紀要』 第 47 巻、pp.289-305
- ・テルマ ハームス リチャード・M. クリフォード他 埋橋 玲子 [訳] (2016) 「新・保育環境評価スケール 1 (3 歳以上)」 法律文化社
- ・イラム・シラージ デニス・キングストン他 秋田 喜代美 淀川 裕美 [訳] (2016) 「「保育プロセスの質」評価スケール―乳幼児期の「ともに考え、深めつづけること」と「情緒的な安定・安心」を捉えるために」 明石書店
- ・藤澤 啓子 中室 牧子 (2017) 「保育の『質』は子どもの発達に影響するのか―小規模保育園と中規模保育園の比較から―」 『RIETI Discussion Paper』 Series17-J-001
- ・秋田 喜代美 芦田 宏他 (2011) 「子どもの経験から振り返る保育プロセス 明日のより良い保育のために」 幼児教育映像制作委員会
- ・鈴木 正敏 (2014) 「幼児教育・保育をめぐる国際的動向 ― OECD の視点から見た質の向上と保育政策 ―」 『教育学研究』 第 81 巻 第 4 号、pp.460-472